



五所川原市相内（旧市浦村）の虫送り（2005. 6. 11）

前回の南部の虫ほいに引き続き、今回は津軽の虫送りをとりあげる。

南部の旧暦6月24日に対田植え後のサナブリ（農休日）に虫送りは行われる。田畑を持つ集落では、にぎやかで楽しみの多い行事として、かつては盛んに行われていた。起源は定かではないが、記録上は江戸時代の中頃まで遡ることができる。

## 津軽地方の虫送り

清野耕司

（県民生活文化課県史編さんグループ）

現代に入り農村社会の激変によって消滅した例も多いが、人々の熱意で昔ながらに存続していたり、中断を経て子どもたちのために復活させたりと、重要な行事として集落がまたある。

津軽の虫送りは、農作物に付く害虫駆除を主な目的として、集落にとつての災厄もまとめて送り出し、豊作と村内安全を願う行事である。ムシと呼ばれる薬の

蛇体人形を害虫の身代わりとして、にぎやかに囃して送り出す。人が扮した「荒馬」が田や畑で暴れ回り害虫を追い出し、それを「太刀振り」踊りが切り払う。荒馬は特に無礼講が許され、人の屋敷でも田畑でも暴れ回り、各戸で振る舞われる御神酒がそれに拍車をかける。荒馬が暴れるほど害虫は退散するという。

全国的にも虫送りは珍しいものではない。西日本では、害虫を源平合戦で稲穂につまみつけて討ち死にした武将（斎藤）の化身と考え、

藤別当実盛の化身と考え、その武将の人形を形代として送り出す「実盛送り」が虫送りの代表的なものである。ただ、津軽の身代わり

の形代が龍や蛇の形をしていることは、他に例を見ない大きな特徴である。虫送りの本質には、農民の生活に致命的なダメージをもたらす害虫や災いは、この世に恨みを残して亡くなった死者の霊すなわち御

霊（こりよう）の祟りであり、それを鎮め祭ること、その霊威にあやかるとする御霊信仰が間接的に関わっているようである。

津軽のムシは害虫や災いのシンボルとも考えられるし、祟りをもたらす怨霊に対抗し、制御できる力を持つ神の姿でもあろうか。その形態は水神としての龍や蛇に

関連するという説もある。集落を練り歩いた後に、村はずれで睨みを効かしたり、田の水口で水を守るムシも津軽には多い。

本来、人々の切実な願いを反映していた集落の共同祈願が、サナブリ行事として楽しみの多いものに変容し、娯楽的な要素を増していったことも津軽の虫送りの特徴といえよう。

歴史上、何度となく悲惨な飢饉に見舞われてきた南部も津軽も、人々の祈りは共通であった。この行事を毎年繰り返す営むことが、日々のくらしを保証してきただけであり、人々の心の支えでもあった。